

『闇の世界史』 p155~159

共同出資会社の原則を利用して**英国銀行の理事たちは手先の一人、アレグザンダー・ハミルトンを合衆国における自らの利益の代理人に任じた。1780年、愛国者と目されているこの男は「連邦準備銀行」の設立を提案した。**

提案によれば、その銀行は、貨幣の発行およびその管理が国民によって選ばれた政府の手で行われるべきであると主張する人々の代理人としての私企業によって所有され、1200万ドルのうち1000万ドルは英国から提供され、残り200万ドルはアメリカの資産家に割り当てられることになっていた—を資本としなければならないとされた。

1783年、ハミルトンおよびその事業パートナーのロバート・モリスは「北米銀行」を組織した。大陸会議の財政の最高責任者として、モリスは戦争の7年間のあいだにアメリカの国庫を困窮状態に陥らせた。「秘密権力」は戦争を利用してその世界革命運動計画を推し進めたことがここでも実証されている。

アメリカの国庫を確実に空にするために、ハミルトンは財務省から最後の25万ドルを移して、北米銀行の授権資本に投資した。合衆国銀行の理事たちは英国銀行の代理人だったから、どちらの銀行もイルミナティの支配下に置かれることになった。イルミナティは魂をサタンに売って世界を手に入れようとした—この事実を彼らは必死になって隠そうとしている。

建国の父は、アメリカの貨幣制度の支配権が英国銀行の理事に独占されれば、**抵当および抵当物受け戻し権喪失の手続きによって、失われた金は二度と戻らなくなると考えた。そして結局のところ、議会は北米銀行に特許状を与えないことで、国家経済の支配権をめぐるこの闘いにけりをつけた。**

1790年、ベンジャミン・フランクリンが没すると、国債金貸し業者のユダヤ人はアメリカの財政に対する支配権を得るよう、またしても命令を発した。代理人たちはアレグザンダー・ハミルトンを首尾良く財務長官の地位に就けた。ハミルトンは自らの支配者がずっと求めていた国立銀行を政府に認めさせた。

当時、公債、個人負債に基づいて通貨を発行する権利を奪取するのは簡単だった。銀行家の代理人は、国家の信用に基づいて議会によって発行される金は外国との取引に価値を失うが、銀行家から貸付けられる金は、利息はかかるものの、法的に保証されたものとしてあらゆるあらゆる取引に歓迎されると、強硬論を展開し反対派を押し切った。

こうして**大衆は、「大衆の味方」を自称する人々によって食べ物にされることになった。アレグザンダー・ハミルトン、ロバート・モリスはあくまでも国債金貸し業者の代理人だった。新しい銀行は3500万ドルを資本とした。このうち2800万ドルはロスチャイルド家が支配するヨーロッパの銀行家から融資された。**ハミルトンは「知りすぎていてもはや信用できない」と、国際銀行家に目をつけられたのかしれない。彼はアーロン・バー（という名の処刑の専門家）に決闘を挑まれて死亡した。